

## 「展覧会 岡本太郎」

大阪中之島美術館 2022.07.23～10.02 東京都美術館 10.18～12.28

愛知県美術館 2023.01.14～03.14

「岡本太郎」(1911～1996)は、1970年に大阪で開催された「日本万国博覧会」のシンボル『太陽の塔』で知られ、今日でも幅広い世代の人々を魅了する芸術家であるが、本展はその芸術人生を振り返る「大回顧展」の開催である。

展示品は、多岐にわたる活動から画伯の代表作を網羅しつつ、これまであまり注目されてこなかった晩年の作品を紹介しながら、その生涯をたどる全貌を楽しむという企画で、一度見たら忘れられないパワフルな作品を観賞できる。

パリ時代の《空間》や《傷ましき腕》、1940～50年代にかけての代表作《森の掟》や《重工場》、そして《遊魂》のように「眼」をモチーフとした晩年の作品まで、画伯の代表作や重要作を網羅的に展示や関連資料が見物である。



岡本太郎 《傷ましき腕》 油彩画 1936/49年 左図

パリでシュルレアリスム運動に参加していた時に制作した戦前の代表作で、真っ赤なリボンと皮膚を螺旋状に切り取るように開かれた腕の肉色が印象的であるが、帰国後戦災で焼失したため戦後に再制作された作品である。

岡本太郎 《森の掟》 1950年 中図

戦後、画伯が唱えた「対極主義」を具現化した代表作の一つで、森の静寂を破るチャックのある怪物の波打つような動きのある得体の知れないモチーフに目を奪われるが、注視すれば実に丹念に描かれた作品である。

恐怖、困惑、怒り、対が、様々な感情が渦巻き、強烈なエネルギーを発して中央のジッパーのみが写實的に光っている。

岡本太郎 《燃える人》 1955年 右図

「原爆にさらされた人間」をテーマに描かれた作品で、戦艦、眼、黒く燃える人間、原子雲など具体的なモチーフを取り込みながら、激しい色彩、鋭角的な筆触、爆発するような構成でテーマを表現している。画伯は、この時期“核をテーマにした作品《瞬間》《死の灰》などを次々と制作している。